
婦人会報

立教184年 12月

令和三年
2021年



天理教婦人会旭日支部

通巻510号

一月例会案内

日時 一月九日(日) 午前十時
場所 旭日大教会
内容 教祖祭
お願いごとめ
よろづよ八首
支部長様お話
お年玉配布(おふでさき短冊等)
お弁当配布



一月例会役割

扨者	生駒 恵美子	山崎 さとえ
賛者	吉田 せつ	山本 ひとみ
指図方	南本 サツエ	

※一月の鳴物当番はありません。

今月の表紙より

甘樫丘は、古くは『日本書紀』などの中にも、その記述がみられ、7世紀前期には当時の有力者であった蘇我蝦夷(そがのえみし)、入鹿(いるか)親子が大邸宅を構えていた場所であるともいわれています。

彼方昔に思いを馳せ巡らせることは、年末の今に一年を振り返ること、とてもよく似ています。新しい年を迎えるに当たり、お世話になった方々を思い返し、感謝の気持ちを持ちましょう。そして元気に通らせていただいたこの一年を神様にお礼申し上げると同時に報恩感謝の心で喜び心で年末年始を過ごしましょう。

旭日大教会のホームページです。一度ご覧いただき活用下さいますようお願いいたします。カラーで楽しめます。
*URL <https://asahi49.net>



女子青年へ案内

女子青年さんの『稿本天理教教祖伝逸話篇』を読んでのアンケートは12月24日締め切りです。よろしくお願いします。



「今年を振り返って」

機本委員部 松田和代

十一月二十三日、自教会の月次祭をつとめさせていただきました。お天気の良い祭日で参拝者も多く、少し新型コロナウィルスの感染への警戒心も緩み、久しぶりにお会いする方々と喜び合う笑顔や弾んだ声があちこちに見え聞こえていました。穏やかで本当に有難い月次祭でした。



現代では個人のプライバシーを守る風潮があり、常識的な振る舞い自身につけた人が多くなったと感じます。思い出しますと、私の子供のころはプライベートな領域に踏み込ん

だり、感情をあらわにしたり、さらにはお酒を飲んで暴言を吐くような人もたくさんおられたように記憶していません。

私は教会生活の中で、いつもどこかに不安を感じていました。お酒が出ますと、やがて教会は子供にとって修羅場と化し、泣かされたりお酌の相手をさせられたり、逃げると追いかけて息をひそめて隠れていました。月次祭の直会はきまつてそうでした。悪いことを正さない宗教家としての両親の態度に、「たんのう」の深い意味を知らない子供時代は疑問も感じていました。そんな日を思い出せば、今日の穏やかな月次祭が有難く、どのようにしたらお帰り頂く信者様方に喜んでいただけるかと、そればかり思います。今日では精神医学の発達により、相手の気持ちを顧みずに思ったことを言う、オプラートに包んだ表現が苦手、あるいは状況にそぐわない発言をして、

対人関係に障害をきたす人は、変えがたい先天的な脳の特性をもっておられることがわかってきました。こうしたことを知ると、私が幼い頃教会生活で抱いた不安や恐れも、そういった特性を有する方から被っていたのかもしれない、と思い返すようになってきました。

また、私の三十年来の友人は、夫の非常識な言動によって、夫婦の信頼関係を構築できず、心を病んで苦しんできました。長年、彼女の相談にのつてきて、先天的にそういった脳の特性を持つている方が一定数おられるという認識はありましたが、ご主人をそのように考えるのは不確かなことですから避けていました。

近年よく耳にする「発達障害」の一種に「^{※1}アスペルガー症候群」という型があります。アスペルガー症候群を有する配偶者との生活の中で、情緒的な関係を築くことの困難さか

ら、心理的不調に陥る「カサンドラ症候群」という新しい心の病も確認されるようになってきました。こういった場合には、夫（あるいは妻）の持つ脳の特徴を夫婦で理解し、それに応じた対応・工夫を学ぶことで夫婦関係や夫婦生活が改善した例も多いそうです。

私がカサンドラ症候群という言葉を知ったのは、まだ数年前のことです。それまでは、彼女を助けたいがために、不安や不満を吐き出してもらったり、信仰の談じ合いをしたり、時には駆けつけたりして一緒に通ってきました。けれどもカサンドラ症候群という病気を知ってから、二人でそれについて学ぶと、話し合いの内容がずいぶん変わりました。主人を変えようとしたり、責めたりせず、自分の心を守る対処法を考えるようにもなりました。しかし、すでに心

を病んでしまっている彼女は、病が癒えず未だ不安に苛まれています。けれども、一筋の解決策が見つかったような気がして、前向きに二人で話し合いや励まし合いを続けていきます。

こんな経験を通して私は、相手を思いやれず言葉を選べない人は、ご自分ではどうしようもないものなんだと思えるようになりました。対話した時に、相手の言葉に氣遣いがなかったり粗暴な言葉に自分が傷ついたとしても、なんとか相手を理解しようとする努力ができるようになりました。また、それは自分の魂の磨きなのだ、その奥にある神の声を聴くことこそ大事なことでと、受け止めるようになりました。しかし、その場ではやはり一度ショックを受けたり、腹が立ったり落ち込んだりするものです。最近も、そんな経験を

し、たいへん傷ついて落ち込みました。心の修復には時間が必要です。腹立ち、高慢、我が身かわいいのほこりを払い、たんのうをして心を低く阿呆になることは、まだまだ私の課題です。

六年前、私は身上をいただいて、残していく人や教会の将来を思うと眠れなくなり、心のバランスを崩してしまったことがありました。それ以来、人の言葉に恐れや不信を抱くと傷つきやすく、不穏な心の状態が蘇ってきます。その反面、自分の心は自分で守らなければいけない、壊れてはいけないと、心を守る術も身に付いてきました。それは心の持ち方、受け止め方、逃げ方でもありませんけれども、もっと大切なことは、小さなことを愛情をもって、人様のために動かせていただくことです。そして、身上のおかげで得た境地、

「今日も生かされている」という喜びを深くすることです。



今年を振り返って色々な出来事を思い出し、心から生かされていることに感謝しています。来年も、すべてを我がこととして、ほこりを積み重ねよう、報恩感謝の気持ちで、小さなおたすけを積み重ねていきたいと思っています。



- ※ 1、アスペルガー症候群・・・「臨機応変に人と接することが苦手で、自分の関心・やり方・ペースの維持を最優先させたいという志向が強いこと」を特徴とする 発達障害。
- ※ 2、カサンドラ症候群・・・パートナーや家族がアスペルガー症候群であるために情緒的な相互関係を築くことが難しく、不安や抑うつといった症状が出る状態のこと。



本部ひのきしんに、いつてきました！



去る十一月五日（金）秋晴れの中、東筋の清掃ひのきしんをさせていただきました。先に東礼拝場に集合し、一日も早いコロナ収束を願って、お願いづとめをいたしました。そして久々に再会する方と笑顔で会話を弾ませながら皆さん勇んでひのきしんに励んでいました。

これからも親神様・教祖にお喜びいただけるよう、自分でできるひのきしんに励ませていただきますよう。参加者は、大人七十一名、こども四名と大勢でした。



- (上)秋晴れのご守護いただきました
- (中)久々の再会にっこり
- (下)どんぐりがたくさん！

柿選び

—逸話篇一六〇より—

ちようど、その時は、秋の柿の出盛りの句であった。榊井おさめは、教祖の御前に出さして頂いていた。柿が盆に載って御前に出ていた。

教祖が、その盆に載せてある柿をお取りになるのに、あちらから、又こちらから、いろいろに眺めておられる。その様子を見て、おさめは、「教祖も、柿をお取りになるのに、矢張りお選びになるのやなあ。」と思つて見ていた。ところが、お取りになったその柿は、一番悪いと思われる柿をお取りになったのである。そして、後の残りの柿を載せた盆を、おさめの方へ押しやつて、

「さあ、おまはんも一つお上がり。」

と、仰せになつて、柿を下された。この教祖の御様子を見て、おさめは、「ほんに成る程。教祖もお選びになるが、教祖のお選びになるのは、我々人間どもの選ぶのとは違つて、一番悪いのをお選りになる。これが教祖の親心や。子供にはうまそうなのを後に残して、これを食べさしてやりたい、という、これが本当に教祖の親心や。」と感じ入つた。そして、感じ入りながら、教祖の仰せのままに、柿を頂戴したのであつた。教祖も柿をお上りになつた。

おさめは、この時の教祖の御様子を、深く肝に銘じ、生涯忘れられなかつた、という。





柿にまつわる話

『柿食えば鐘がなるなり法隆寺』

(正岡子規)

俳人 正岡子規は柿が大好物で
医者から柿の食べ過ぎをたしなめ
られる程であったそうです。

当時、親交のあった天田愚庵
(あまだぐあん)という禅僧が

いました。愚庵は、かつて松尾
芭蕉の弟子の去来の住居だった
京都嵯峨野の落柿舎(らくししゃ)

に住み、毎年庭で収穫した柿の
実を柿が大好物だった子規に送
っていたのだそうです。ある年、
子規は愚庵から届いた柿の礼状
に、次のような歌をしたためま
した。

柿の実の渋きもありぬ

柿の実の甘きもありぬ

渋きぞうまき

晩年の子規は胸を患い、余命い

くばくもないことを自覚していま
した。それを知った愚庵は「(息
のあるうちに)少しでも早く好物
の柿を届けてやりたい」と思った
のでしよう、「つい待ちきれずに渋
みの抜けきらない柿の実を送って
しまったのです。」

そんな愚庵の気持ちを、口に入
れた柿の渋みからとつきに察した
子規は友人への深い感謝を前述の
句に表したのです。



『柿の実をひとつ残して秋深し』

(詠み人知らず)

柿の実の収穫を終えるとき、全
部を採らないで木の先端に一二
つの実を残しておくことを「木守
柿」といいます。

来年も良く実るようにとのおまじ
ないですが、これから野山に食料
が少なくなる冬を迎え、鳥たちに
も残してあげる意味もあるそうで
す。

12月の和名は「師走」です。そ
の由来は師匠の僧がお経をあげる
ために東西を馳せる忙しい月であ
るといことです。

新型コロナウイルスに世界中が
影響を受けた令和3年7年の瀬を
迎えました。教祖の慈愛に満ちた
柿選びの逸話から、また、先人の
風習や故事から学ばせて頂き、お
互い忙しい中でも感謝と優しい心
を忘れずに本年を締めくくりたい
ものです。





発行所	発行者	発行日
天理市田井庄町一二八	岡本道子	令和三年十二月五日